

京都府京田辺市

新田遺跡第4次発掘調査概報

—大住地区ほ場整備事業地内の調査 その3—



1999

京田辺市教育委員会



調査地（北東から）



調査地（北西から）

序

本市北部の大住地区において、大規模なほ場整備事業が実施されていますが、この区域にはいくつかの遺物散布地が存在しています。

そこで、ほ場整備事業と埋蔵文化財との円滑な調整をはかるための事前の試掘調査を平成8年度から行っています。

今年度は新田遺跡の調査を行いました。古代から中世の遺構・遺物が各所からみつき、集落跡が広がっていることが予想されます。

最後になりましたが、今回の調査にあたりましては、土地所有者の方々、関係機関をはじめ多くの方々のご協力・ご指導をいただきましたこととお礼申しあげるとともに、今後とも埋蔵文化財に対しご理解賜りますようお願い申しあげます。

平成11年3月

京田辺市教育委員会

教育長 村 田 新之昇

例 言

- 1 本書は、平成10年度に京田辺市教育委員会が行った新田遺跡発掘調査しんでんの概要報告である。
- 2 本調査は、京都府が計画した大住地区ほ場整備事業にともない、国庫補助事業として実施した。
- 3 現地調査は平成10年12月11日に開始し平成11年1月29日に終了した。
- 4 調査組織は次のとおりである。

調査主体……京田辺市教育委員会

調査責任者……京田辺市教育委員会 教育長 村田新之昇

調査指導……京都府教育委員会・京都府立山城郷土資料館・京田辺市文化財保護委員会

調査担当者……京田辺市教育委員会 社会教育課 鷹野一太郎

同 上 五百磐頭一

調査事務局……京田辺市教育委員会 教育次長 中川 勝之

同 社会教育課 課長 奥田 清

同 課長補佐 桐山 弘男

同 社会教育係長 木村稚可子

調査参加者……阿知波琢士・植西美津子・原 クニ江

作業委託……全京都建設協同組合

- 5 調査を実施するについて、京都府山城土地改良事務所・京田辺市農業土木課には多大のご協力を賜った。記して感謝します。
- 6 調査期間中及び本書を作成するにあたり、次の方々からご教示を得た。記して感謝の意とします。(順不同・敬称略)

磯野浩光・肥後弘幸・森 正・奈良康正・久保哲正・橋本清一・平良泰久・奥村清一郎
八十嶋豊成

- 7 本書の執筆・編集は鷹野が行った。

1 はじめに

京田辺市松井及び大住において、府営ほ場整備事業が行われることになり、同地区内に所在する魚田遺跡・新田遺跡等について、ほ場整備事業と遺跡保存との調整をはかるための資料を得ることが必要となった。

そこで京田辺市教育委員会では、京都府教育委員会と協議の結果、ほ場整備事業地内の遺跡について、範囲及び状況等の確認、遺跡保存のための基礎資料作成のため、平成8年度から発掘調査を実施することとした。

今年度は、新田遺跡の発掘調査を行った。

なお、土地所有者の方々をはじめ、関係者の方々、寒中強風のなか作業に従事された皆さん、その他多くの方々の協力によって今回の調査が行われたことをここに記して感謝の気持ちとしたい。



調査地位置図 (S = 1:20,000)

IV : 今年度調査地

2 位置と環境

京田辺市は京都府南部に広がる南山城平野のほぼ中央、伊賀山中に源を発する木津川の左岸に位置する。市の西部は生駒山系に連なる丘陵地帯で、東部は北流する木津川によって形成された沖積平野が広がっている。大阪層群からなる西部の丘陵は起伏が激しく、丘陵から東の木津川に流れる多くの小河川によって開析谷・扇状地が形成されている。またその小河川の大半は東の平野部で天井川化しており、市の景観は独特の様相を呈している。

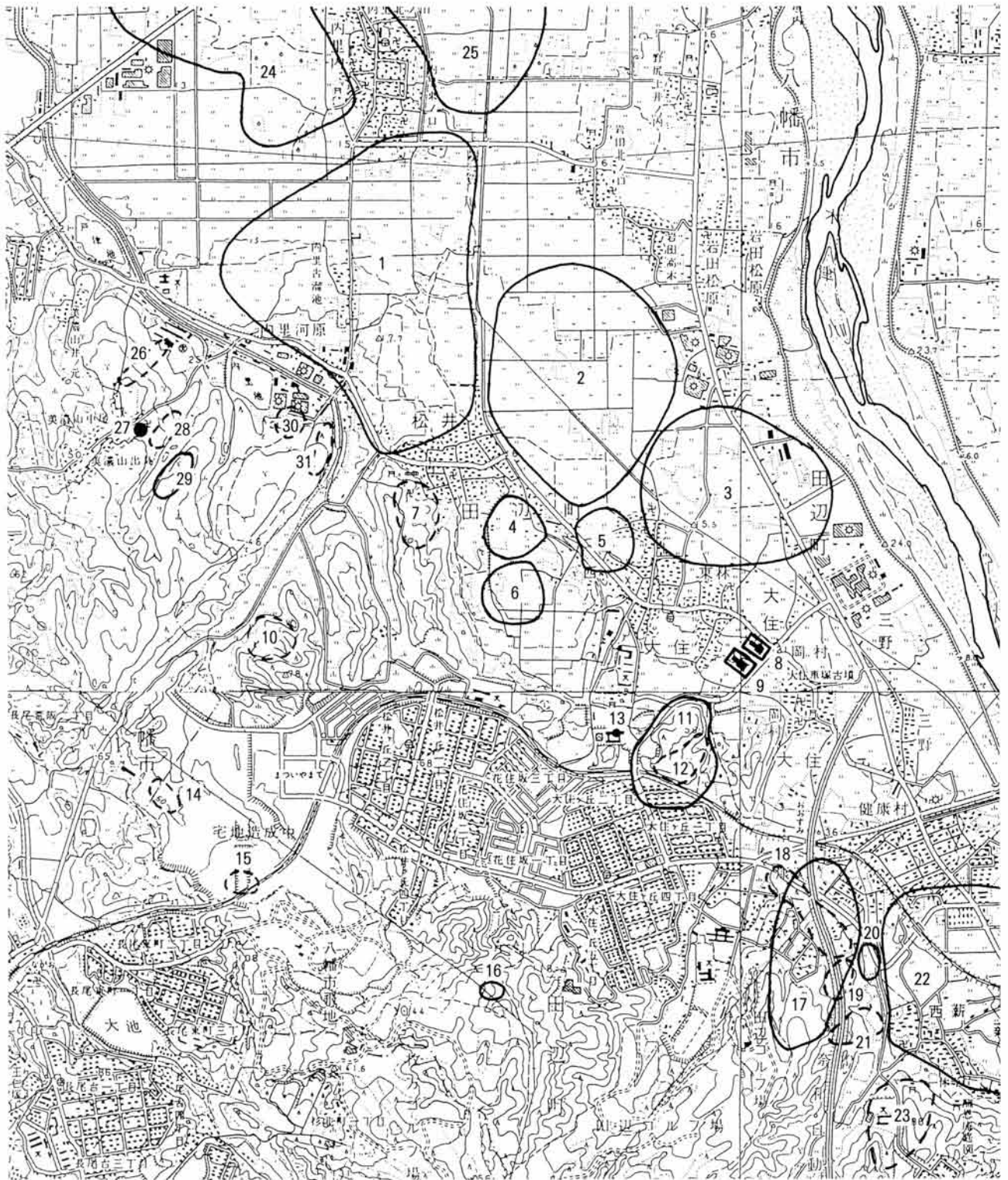
今回の調査地は市の最北端、八幡市との境にあたるが、その周辺の主な遺跡をみてみると、まず調査地南西、松井の集落の裏山にかつては19基以上が確認された松井横穴群があげられる。ここから南東の京田辺市薪、北西の八幡市美濃山にかけての丘陵地には、松井横穴群のほか、堀切・荒坂・女谷・美濃山・狐谷の各横穴群が分布している。これらの横穴群は6世紀後半から7世紀初頭にかけて築造されたとみられるが、文献から奈良時代にはこの地域が隼人の居住地であったことや、崩れやすく横穴に適さない洪積砂礫層を基盤としながらも大規模な横穴群を形成していることから、これらの横穴群を隼人集団の墳墓と推定し、6世紀後半にはこの地域に隼人が移配されていたとする見方もある。

調査地から約1.5km南東に、大住車塚古墳・大住南塚古墳が存在する。大住車塚古墳(通称チコンジ山)は周濠をもつ前方後方墳として古くから知られ、昭和49年(1974)に史跡指定を受けている。その南西に隣接する大住南塚古墳は以前は前方後円墳と考えられていたが、昭和61・62年(1986・1987)の当教育委員会による調査で、葺石・埴輪等がみつき、4世紀後半に築かれた、大住車塚古墳と同じく周濠をもつ前方後方墳であることが明らかとなった。これにより、周濠をもつ前方後方墳が2基並ぶという全国的にも珍しい形態であることが確認された。

調査地の東側には、新田遺跡と同様に本市と八幡市にまたがって広がる魚田遺跡がある。昨年までの調査で、本市北端部で木津川の旧河道がみつかったほか、明治29年(1896)のものと考えている洪水砂が広い範囲から、一部では伏見地震(1596)によるとみられる噴砂もみついている。

新田遺跡については、過去に3回の発掘調査が行われ、八幡市側では、古墳時代中期・後期の竪穴住居跡と弥生時代から平安時代の遺物が、本市側では時期不明の掘立柱建物跡と飛鳥・奈良時代、中世の遺物がみついている。

そのほか、この地域の文化財としては、式内社である松井の天神社(本殿は京都府登録文化財)・大住の月読神社があげられる。このうち月読神社には、毎年10月14日、大住隼人舞が大住隼人舞保存会により奉納されている。また、大住車塚・南塚古墳の南東、岡村の集落には元文5年(1740)に建てられ、重要文化財に指定されている澤井家住宅がある。



1. 新田遺跡 2. 魚田遺跡 3. 散布地 4. 散布地 5. 散布地 6. 散布地 7. 松井横穴群 8. 大住車塚古墳
9. 大住南塚古墳 10. 口仲谷古墳群 11. 大住城跡 12. 城山古墳群 13. 内山古墳 14. 交野ヶ原窯跡群
15. 松井窯跡群 16. 虚空蔵谷遺跡 17. 狼谷(小谷)遺跡 18. 郷土塚古墳群 19. 畑山古墳群 20. 畑山遺跡
21. 西山古墳群 22. 薪遺跡 23. 堀切古墳群・横穴群 24. 内里五丁遺跡 25. 内里八丁遺跡 26. 狐谷横穴群
27. 王塚古墳 28. 美濃山横穴群 29. 美濃山廃寺跡 30. 女谷横穴群 31. 荒坂横穴群

周辺主要遺跡図 (S = 1:25,000)

3 調査経過

府営ほ場整備事業の対象となったのは、京田辺市松井から大住にかけての約87haであり、平成8年度から発掘調査及び区画整備が行われている。

今回の調査地は、松井集落の北側一帯で、府道富野荘・八幡線と現在建設中の第二京阪道路に囲まれた部分である。調査地の南西は大阪・枚方方面への谷地形となり、この谷の上流からの土石流等により南西から北東へ向けての下り傾斜が形成され、段のある耕作地となっている。

現地調査は稲刈り後の平成10年12月11日から着手し、平成11年1月29日に終了した。調査は西側の府道沿い付近から開始し、南側へ次に北側へと千鳥状に移動し、その後確認補足のためのトレンチと合計77か所のトレンチを対象地に入れた。

西側の府道沿いでは、南西の谷からと見られる土石流等による砂・砂礫層がみられ、湧水も多い。南側は比較的段のない高台が東西に広がり、飛鳥時代～平安時代にかけての遺物包含層やピットなどの遺構が各トレンチからみつかった。東側は低い部分となり、灰色系粘土層の堆積がみられ、かつては沼沢地であったことが予想される。以上以外の中央部から北部にかけては、瓦器碗を含む中世の遺物包含層が多く、多くのトレンチでみつかったほか、古代の遺物がみつかったところもある。

なお、今回の対象地の北東端近くに昭和15年（1940）2月25日陸軍機が墜落した旨の石碑が建立されている。周辺にも調査は及んだが、落下を示すものはみつからなかった。



調査地近景（東から）



作業風景（48トレンチ）



トレンチ配置図 (S=1:2,500)

4 調査概要

調査は前述のように対象地に77か所のトレンチを設定し行った。対象地は南から北へ、西から東へと傾斜が下がっていく。南端は、現在の松井集落との間に比高差約3.5mで谷地形が形成され、西から東へと流れた旧河道であることがわかる。

耕作面の標高は調査地西端の高所で21.64m、400m離れた北東隅で13.29mである。一部の畑地を除きほとんどが水田として耕作されている。

調査は幅2m、長さ2～4mを基準とし、重機あるいは人力により深さ1m程度掘削後、土層を主としたトレンチの状況を記録した。

調査地の西端部の1～6トレンチでは、耕作土の下に砂・砂



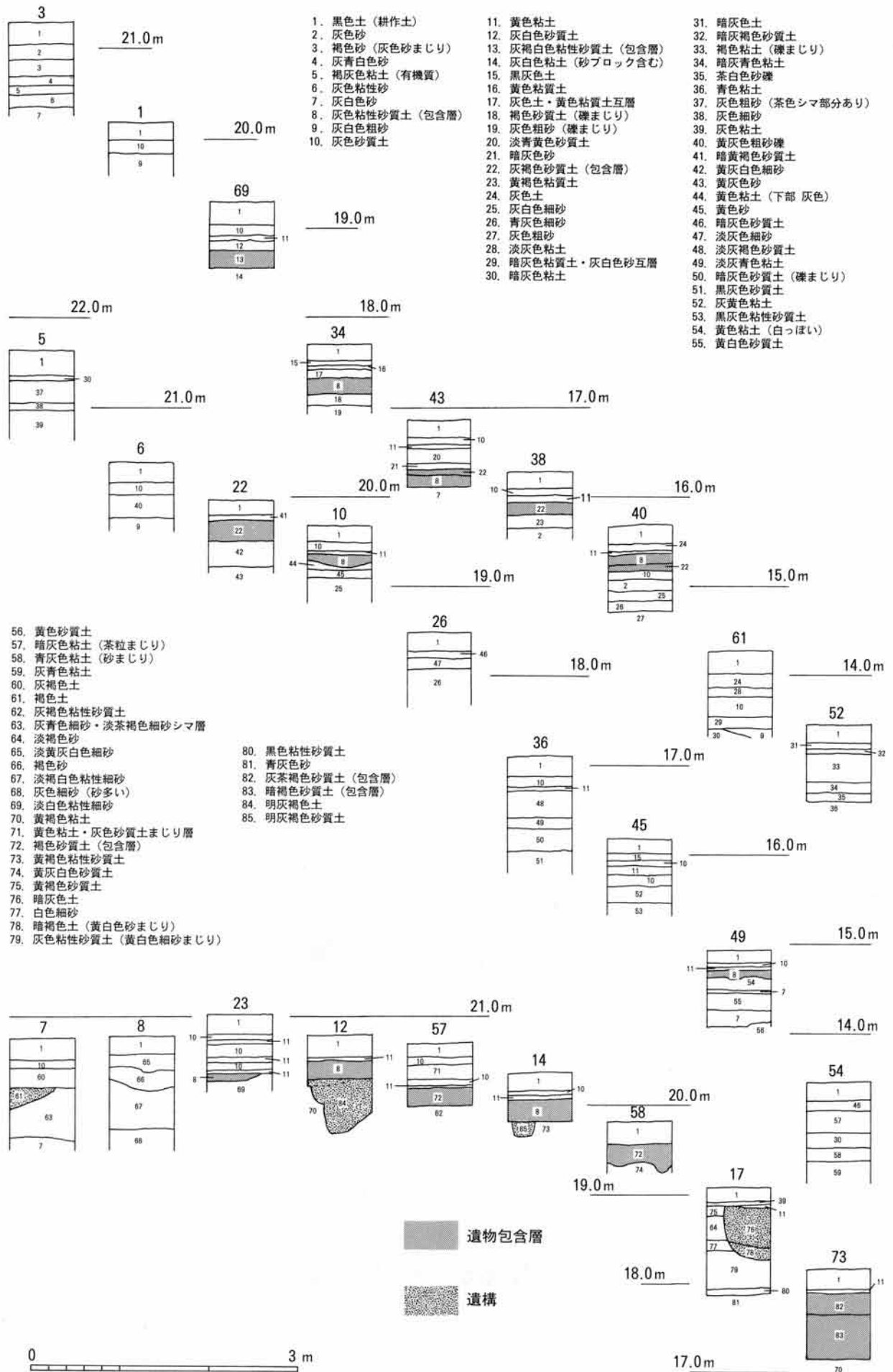
12トレンチ (南から)



15トレンチ (北から)



17トレンチ (南から)



トレンチ土層略測図 (上の数字がトレンチ名)

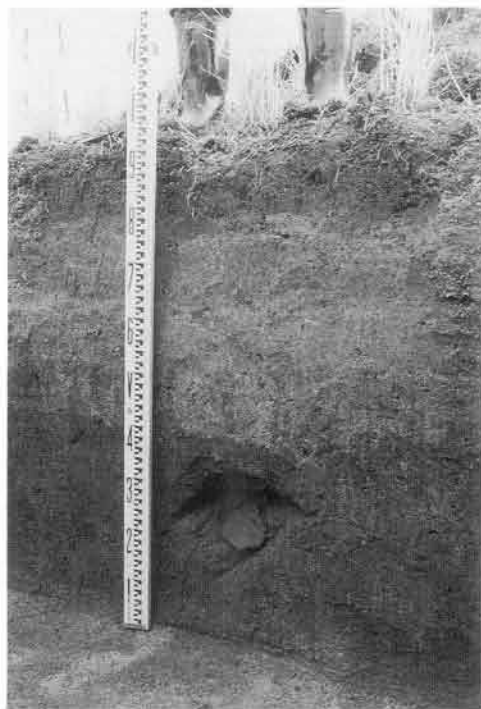
礫層がみられ、西南の谷部からの土石流等による堆積であることがわかった。

南側の12・18・57・58・70・71トレンチでは耕作土の下に飛鳥時代～平安時代の遺物を含む遺物包含層がある場合が多く、その下からはピット、土塚等が見つかったトレンチもある。これらの北東側一段低い側にあたる19・72～74・47トレンチでは、遺物包含層も厚く、平安時代を中心とした遺物の量も多い。ことに73トレンチでは、厚さ0.75mの包含層があり、その下にはピットがみついている。72トレンチからは10世紀前半の土師器・黒色土器が多くみつき、47トレンチからは須恵質の円筒埴輪、古墳時代後期の土器類、平安時代の緑釉陶器などもみついている。

調査地東端部の52～55・59・60トレンチでは褐色味の強い耕色土の下は暗灰色系の粘土がみられ、沼地状であったことがわかる。この暗灰色粘土からは近世の遺物が見つかった。

中央部の25～28・64・37トレンチは遺物等がみられず、砂・粘土の堆積から西部からの旧流路と考えられるが、その他のほとんどのトレンチでは中世（瓦器碗を含むものが多い）の遺物包含層があり、44トレンチでは古代の土塚が見つかった。

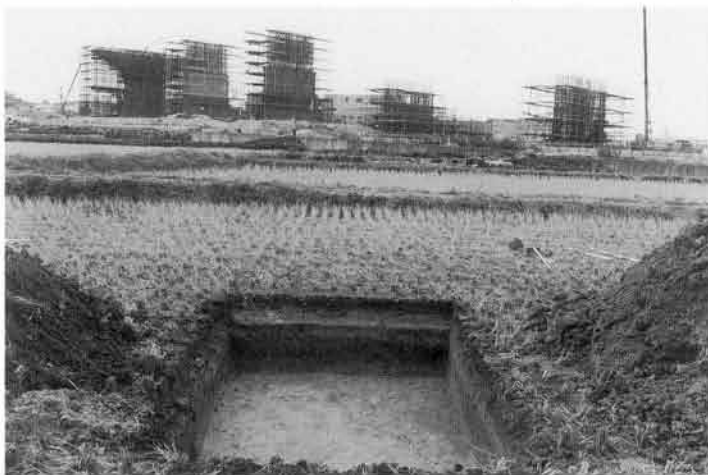
第二京阪道路建設にともなう調査でも中世の遺物包含層が各所でみついていることから、付近一帯に広く存在していることがわかる。



47トレンチ 埴輪出土状況



20トレンチ（東から）



38トレンチ（東から）

5 遺 物

今回の調査でみつかった遺物は、量的には整理箱につめて3箱分である。このうち1箱は73トレンチからのものである。種類としては、埴輪・土師器・須恵器・瓦・緑釉陶器・瓦器・青磁・陶器・木片がみられ、時代的には古墳時代から近世に及ぶ。

図示したものは飛鳥時代に属するものと、良好な古代の遺物包含層があった47・72・73トレンチからのものである。

1は須恵器の杯フタで、内側に返りをもち口径9.7cm。天井部には自然釉がかかる。2は土師器のカマド基底部である。淡褐色を呈し、外面にはたてハケが施される。ともに18トレンチからみつかった飛鳥時代のもの。

3はいわゆる杯Gである。口径9.1cmで外面下半部に回転ケズリがみられる。49トレンチからみつかった。

4は17トレンチのピットからみつかった土師器の鉢である。口径22.0cm。胎土は精良で淡褐色を呈する。外面にはヘラミガキがみられる飛鳥時代のもの。

5～9は47トレンチの遺物包含層からみつかったものである。

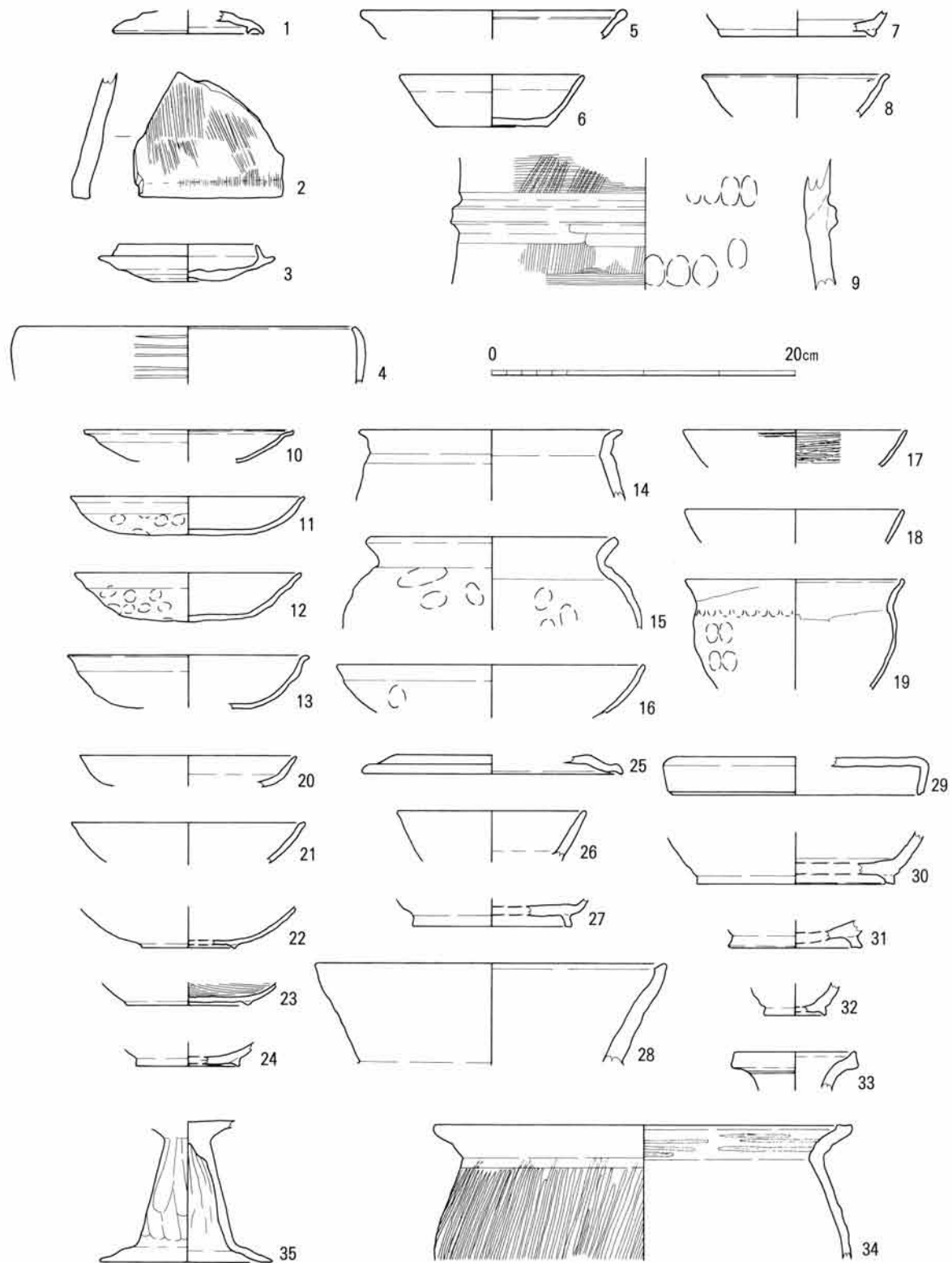
5は須恵器の皿で口径17.0cm。口縁端部は玉縁状に作られる。6は同じく杯で口径11.9cm、器高3.4cm。7は同じく杯B。8は緑釉陶器の椀である。口径12.0cmで軟陶、淡緑色の釉が施される。これらは9世紀前半のものとみられる。9は須恵質の円筒埴輪である。断面台形の低いタガがめぐる。胎土は粗い。タガより下ではたてハケの後よこハケされる。タガより上では、ハケの前にタタキがあるようにもみえるが、よくわからない。

10～19は72トレンチの遺物包含層からみつかったものである。

10・11は土師器の皿で口径13.7cmと15.2cm。12・13は同じく杯で口径14.8cmと15.6cm。ともに淡赤褐色を呈する。14・15は同じくカメで、ともに胎土は粗くザラザラし、暗赤褐色を呈する。16～18は黒色土器の椀である。いずれもA類。16は口径19.8cmの大型品。19は黒色土器のカメである。A類。口径14.2cmで体部はうすく仕上げている。これらの土器類は10世紀前半のものである。

20～35は73トレンチの遺物包含層からみつかったものである。

20は土師器の皿で口径14.2cm。21は同じく椀で口径15.2cm。22～24は黒色土器の椀底部である。いずれもA類。25～33は須恵器である。25は杯フタで口径16.9cm。26は杯身で口径12.2cm。27は杯Bで高い高台をもつ。28は大型のカメの口縁部である。口径22.6cm。29は薬ツボのフタで口径16.4cm。30～32はツボ類の底部である。33はツボの口縁部である。34は土師器のカメである。口縁部内面と外部外面には深く幅の広いハケが施されている。これらの土師器は概ね9世紀前半のものとみられる。35は古墳時代の土師器の高杯である。脚部外面はたて方向にヘラなでされ、内面にはしぼり痕がみられる。



18トレンチ：須恵器フタ（1）、土師器カマド（2） 49トレンチ：須恵器杯（3） 17トレンチ：土師器鉢（4）
 47トレンチ：須恵器皿（5）、須恵器杯（6・7）、緑釉陶器碗（8）、円筒埴輪（9）
 72トレンチ：土師器皿（10・11）、土師器杯（12・13）、土師器カメ（14・15）、黒色土器碗（16～18）、黒色土器カメ（19）
 73トレンチ：土師器皿（20）、土師器碗（21）、黒色土器碗（22～24）、須恵器フタ（25・29）、須恵器杯（26・27）
 須恵器カメ（28）、須恵器ツボ（30～33）、土師器カメ（34）、土師器高杯（35）

遺物実測図

6 まとめ

今回の調査は広大な新田遺跡の南部分の調査であり、京田辺市側としては2回めのものであった。その内容はこれまで述べてきたとおりである。

南端付近の高所では、飛鳥時代から平安時代（7世紀から10世紀前半）までの遺構・遺物が各トレンチからみつき、同時期の集落が考えられるが、瓦や緑釉陶器という遺物が注目される。これらの北側の低い部分では、多くのトレンチから中世の遺構・遺物がみつかった。

第二京阪道路建設にともなう調査でみつかった飛鳥・奈良時代の遺物と、今回のものとの関係は明らかでないが、中世の遺物については、今回と一連のものとみられる。

ところで『続日本紀』の称徳天皇の天平神護元年（765年）八月一日、「益女を山背国綴喜郡松井村に絞す」という記事がみえる。これは紀益女という巫女（妖術使い）を松井で絞罪に処したということであり、松井は今回の調査地一帯と考えられている。

これは、恵美押勝（藤原仲麻呂）謀反の密告の功により、従三位参議兵部卿となった和氣王（舍人親王の孫）は淳仁天皇の廃位にかかわり、孝謙が重祚し称徳天皇となったが、皇嗣がないことから自ら皇位を望み謀反を計画したが発覚し（あるいは密告され）、伊豆国へ配流の途中、山背国相楽郡で絞殺され狛野（現在の相楽郡精華町）に埋められたという事件にかかわっての事である。

益女は和氣王の背後にあって、恵美押勝事件で無位から従五位下に叙せられている。また孝謙上皇に近接する女官でもあったらしい。和氣王は益女を信じ、弊物を略することもあった。

このようなことから、王の事件に連座し処刑されたことになる。

今回の調査で当時の集落が予想されることは、この記事との関連が注目されるとともに当時の官道（山陽道）とのかかわりがどうであったのか興味がかかる。

<参考文献>

- 奥村清一郎「八幡地区圃場整備事業関係遺跡昭和58年度発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報（1984）』京都府教育委員会）1984
- 筒井崇史・森正哲次「京都南道路関係遺跡平成4年度発掘調査概報（3）新田遺跡」（『京都府遺跡調査概報』第56冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）1994
- 西田直二郎『洛南大住村史』大住村 1951
- 吉川弘文館『国史大辞典』



平成11年3月30日 印刷

平成11年3月31日 発行

新田遺跡第4次発掘調査概報

—大住地区は場整備事業地内の調査 その3—

（京田辺市埋蔵文化財調査報告書第29集）

編集・発行 京田辺市教育委員会

〒610-0393 京都府京田辺市田辺80番地

電話 0774-62-9550

印刷 明新印刷株式会社

〒630-8141 奈良市南京終町3丁目464番地

電話 0742-63-0661